

「放蕩息子」

ルカの福音書 15:11～32

はじめに

今日の箇所にあるイエシュアのたとえ話もまた大変有名で、しかもたとえの中でも最も長い話となっている「放蕩息子」のたとえと呼ばれているものです。この「放蕩」とは一般的に自分の思うままに振る舞うことであり、やるべきことをやらず自分のやりたい放題にして、家の財産などを使い尽くしていくことです。特に酒にふけったり、女遊びにふけることを指すことが多い言葉です。最近では放蕩（ホートー）息子よりもニート息子の方が問題視されていますが…親の財産を食いつぶすという点ではどちらも同じです。旧約聖書にある律法ではこのような息子に対し、こう定められています。

申命記【新改訳 2017】

21:18 ある人に強情で逆らう子がいて、父の言うことも母の言うことも聞かず、父母に懲らしめられても聞こうとしない場合、

21:19 その父と母はその子を捕らえ、町の門にいる町の長老たちのところへ連れ出し、

21:20 町の長老たちに、「私たちのこの息子は強情で逆らいます。私たちの言うことに聞き従いません。放蕩で大酒飲みです」と言いなさい。

21:21 町の人はみな彼を石で打ちなさい。彼は死ななければならない。あなたがたの中からその悪い者を除き去りなさい。イスラエルはみな聞いて恐れるであろう。

「石で打ちなさい。彼は死ななければならない」とあるように、放蕩息子に対する主の戒めは本来、大変厳しいものです。しかし今日のたとえではそのような死に値する罪人が赦され、それどころか愛され、受け入れられ、祝福される者となるという、福音の根幹を指すような物語です。多くのクリスチャンがこの放蕩息子の姿に自分自身の歩みを重ね、主に赦された者、救われ、愛される者としての信仰によって感謝と賛美をささげています。確かにその信仰姿勢は真理でありすばらしいものです。しかし神のご計画というものは神と私という個人的な関係だけで完成、完了となるものではないということをぜひ覚えてください。なぜなら神はこの地にご自身の国を建てようとしておられるからです。それは王国であり、王と民、法と秩序が存在し、その御国の繁栄を見ることになり、決して一個人の小さな世界ではないのです。このたとえをヘブル語の最初の言及の視点をもって読み解くならば、これがその御国を建てるために今のこの時代を終わらせる、世の終わりの日に起こる神のご計画を指し示したものであることがわかります。父よ、御名が聖とされ、御国が来ますように、御心が天で行われているように、この地にもなりますようにと祈りつつ、今日の御言葉の中に入ってまいりましょう、主イエシュアの御名によって。

1. 弟

ルカの福音書【新改訳 2017】

15:11 イエスはまた、こう話された。「ある人に二人の息子がいた。」

15:12 弟のほうが父に、『お父さん、財産のうち私がいただく分を下さい』と言った。それで、父は財産を二人に分けてやった。

15:13 それから何日もしないうちに、弟息子は、すべてのものをまとめて遠い国に旅立った。そして、そこで放蕩して、財産を湯水のように使ってしまった。

このたとえはまず父が二人の息子に「財産」を分与するところから始まります。ここに使われているネヘス(נֶחֶס)とは本来、土地や建物のことではなく「家畜や銀、金、青銅、鉄、衣服(ヨシュア 22:8)」を指す言葉ですので、それらをまとめて「弟息子は…遠い国に旅立った」とあります。ここに使われている「遠ざかる」という意味のラーハク(לָחַק)の初出箇所を見てください。

創世記【新改訳 2017】

21:14 翌朝早く、アブラハムは、パンと、水の皮袋を取ってハガルに与え、彼女の肩に担がせ、その子とともに彼女を送り出した。それで彼女は行って、ベエル・シェバの荒野をさまよった。

21:15 皮袋の水が尽きると、彼女はその子を一本の灌木の下に放り出し、

21:16 自分は、弓で届くぐらい離れた向こうに行って座った。「あの子が死ぬのを見たくない」と思ったからである。彼女は向こうに座り、声をあげて泣いた。

これはアブラハムのそばめハガルについての記述です。主人の家を追い出された彼女は、水のない荒野をさまよった末、連れていた息子を放り出し「離れた向こうに行って」泣いたとあり、ここに聖書で最初のラーハクがあります。それは「子が死ぬのを見たくない」というハガルの言葉を指しており、この事実からラーハクとは荒野のような死の淵にあっても「死を見ない、死から離れる」という意味の言葉であると言えます。結果的に神の介入によりハガルもその子も死ぬことなく主人の家に帰されました。このハガル(הַגָּר)という名には「異邦人」という意味のゲール(גֵּר)が込められており、つまり上記の記述から、死の淵から救い出されラーハク、遠ざけられ、家に帰されるゲール、異邦人の姿がこの「弟息子は…遠い国に旅立った」というたとえには秘められているのです。

またさらに、この「弟息子」はヘブル語直訳では「小さい息子」となり、ここに「小さい」という意味のツァーイール(צַעִיר)が使われています。この言葉の初出は「ツォアル(צֹעַר)」という町の名として記されており、この町はソドムとゴモラの町が天からの火によって滅ぼされる時、ロトと二人の娘が逃れた町です。

創世記【新改訳 2017】

19:22 急いであそこへ逃れなさい。あなたがあそこに着くまでは、わたしは何もできないから。」それゆえ、その町の名はツォアルと呼ばれた。

19:23 太陽が地の上に昇り、ロトはツォアルに着いた。

19:24 そのとき、主は硫黄と火を、天から、主のもとからソドムとゴモラの上に降らせられた。

19:25 こうして主は、これらの町々と低地全体と、その町々の全住民と、その地の植物を滅ぼされた。

このように「小さい息子」である「**弟息子は…遠い国に旅立った**」というイエシュアのたとえには、滅びを免れ、救い出される異邦人の存在が指し示されており、それは私たち教会を指しているとも言えますが、究極的には世の終わりの大患難の中から、その渦中から救われる異邦人たち、国々の民を指し示しています。それは次にたとえられているように、大飢饉の中で自分の罪に気づき、立ち返ろうとする弟息子のようです。

2. 豚

ルカの福音書【新改訳 2017】

15:14 何もかも使い果たした後、その地方全体に激しい飢饉が起こり、彼は食べることに困り始めた。

15:15 それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑に送って、豚の世話をさせた。

15:16 彼は、豚が食べているいなご豆で腹を満たしたいほどだったが、だれも彼に与えてはくれなかった。

弟息子は「豚」の世話をさせられました。この動物は「汚れたもの（レビ 11:7）」とされ、イスラエルでこれを扱う人はいません。つまりこれは異邦人の象徴と言えます。そして弟は「**豚が食べているいなご豆で腹を満たしたいほどだったが、だれも彼に与えてはくれなかった**」とあります。このたとえの意味を考えたことがあるでしょうか。このいなご豆はハルーヴィーム(חֲרֻבִּים)「干からびた(豆)」という意味で「干上がる、乾く」という意味のハーレーヴ(חֲרֵב)が使われています。この初出の示す意味は私たちにとって非常に重要です。

創世記【新改訳 2017】

8:13 六百一年目の第一の月の一日に、水は地の上から干上がった。ノアが箱舟の覆いを取り払って眺めると、見よ、地の面は乾いていた。

「地の上から干上がった」すなわち地上から引き上げられ、いなくなったという、これがハーレーヴという言葉の本来の意味であり、つまりそれは主が空中に來られ、天に引き上げてくださるという I テサロニケ 4:16~17 に預言された携挙を指し示すものであり、「**豚が食べているいなご豆**」ハルーヴィームに秘められた神のご計画の奥義です。つまりここにたとえられたいなご豆を食べる豚とは、携挙される私たち教会を指しているということです。これは何とも嬉しいような嬉しくないようなたとえですが、弟息子はこれを食べることはできません。それは彼の存在が世の終わりの大患難の中で主イエシュアとその福音を聞いて信じる異邦人たちを表しているからです。携挙とはその大患難が起こる前に成就されるものです。その事実が「**豚が食べているいなご豆で腹を満たしたいほどだったが、だれも彼に与えてはくれなかった。**」というたとえには表されているのです。

3. 大勢の雇い人

ルカの福音書【新改訳 2017】

15:17 しかし、彼は我に返って言った。『父のところには、パンのあり余っている雇い人が、なんと大勢いることか。それなのに、私はここで飢え死にしようとしている。

15:18 立って、父のところに行こう。そしてこう言おう。「お父さん。私は天に対して罪を犯し、あなたの前に罪ある者です。

15:19 もう、息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください。』

「ここで飢え死にしようとしている」弟息子は我に返り、そして「父のところに…いる雇い人が、なんと大勢いること」かと思ひめぐらし、その「雇い人の一人に」なることを切望しています。この「なんと大勢いることか」と表現されている「雇い人」が指し示すもの、それはもちろん以下の預言です。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

7:9 その後、私は見た。すると見よ。すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が御座の前と子羊の前に立ち、白い衣を身にまとい、手になつめ椰子の枝を持っていた。

7:13 すると、長老の一人が私に話しかけて、「この白い衣を身にまとった人たちはだれですか。どこから来たのですか」と言った。

7:14 そこで私が「私の主よ、あなたこそぞ存じます」と言うと、長老は私に言った。「この人たちは大きな患難を経てきた者たちで、その衣を洗い、子羊の血で白くしたのです。

この「大きな患難を経てきた」「だれも数えきれないほどの大勢の群衆」のうちの一人になることを求める者、それがこの「雇い人の一人にしてください」と告白する弟息子の存在にはたとえられているのです。そして上記の預言にある「白い衣を身にまとい」「この白い衣を身にまとった人たち」「その衣を洗い、子羊の血で白くしたのです」という預言が次にたとえられています。

ルカの福音書【新改訳 2017】

15:20 こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとへ向かった。ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけて、かわいそうに思い、駆け寄って彼の首を抱き、口づけした。

15:21 息子は父に言った。『お父さん。私は天に対して罪を犯し、あなたの前に罪ある者です。もう、息子と呼ばれる資格はありません。』

15:22 ところが父親は、しもべたちに言った。『急いで一番良い衣を持って来て、この子に着せなさい。手に指輪をはめ、足に履き物をはかせなさい。

15:23 そして肥えた子牛を引いて来て屠りなさい。食べて祝おう。

15:24 この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから。』こうして彼らは祝宴を始めた。

このように、子羊イエシュアの天の御座の前に立つ群衆たちの「白い衣」が弟息子に着せられる「一番良い衣」にたとえられているのです。また「指輪」は王としての権威の象徴であり（創 41:42）、「履き物」

はただ神によって富む者となることを意味します（創 14:23）。世の終わりの大患難、それは「世の始まりから今に至るまでなかったような、また今後も決してないような、大きな苦難（マタイ 24:21）」と呼ばれています。そのような中であってもここにたとえられた父親のような神のあわれみがあることがここには表されており、そして神である主があわれむと選ばれた者、定められた者はどのような状況からでも、まさに「**まだ家までは遠かったのに**」どんなに遠く離されていても、死の淵から、いや死人の中からでも必ずみな救い出されるということがここにはたとえられているのです。それはまさに「**死んでいたのに生き返り**」とたとえられているとおりです。

そして前回も述べたように、「**罪ある者**」聖書が示す罪とは悪と同じではありません。それは主の家に入れてもらえず、戸口で打ちひしがれ、中にいれてもらうことを必死に慕い求めている者です。主を信じ求める者とは自分が神の前に罪人であることを告白する者です。イエシュアを憎んだユダヤ人の指導者たちはみなこれを認めず、自分たちの罪を否定しました。そのような者の姿が次にたとえられています。

4. 兄

ルカの福音書【新改訳 2017】

15:25 ところで、兄息子は畑にいたが、帰って来て家に近づくと、音楽や踊りの音が聞こえてきた。

15:26 それで、しもべの一人を呼んで、これはいったい何事かと尋ねた。

15:27 しもべは彼に言った。『あなたのご兄弟がお帰りになりました。無事な姿でお迎えしたので、お父様が、肥えた子牛を屠られたのです。』

15:28 すると兄は怒って、家に入ろうともしなかった。それで、父が出て来て彼をなだめた。

15:29 しかし、兄は父に答えた。『ご覧ください。長年の間、私はお父さんにお仕えし、あなたの戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しむようにと、子やぎ一匹下さったこともありません。』

15:30 それなのに、遊女と一緒に、お父さんの財産を食いつぶした息子が帰って来ると、そんな息子のために肥えた子牛を屠られるとは。』

15:31 父は彼に言った。『子よ、おまえはいつも私と一緒にいる。私のものは全部おまえのものだ。』

15:32 だが、おまえの弟は死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから、喜び祝うのは当然ではないか。』

この兄息子とは「**戒めを破ったことは一度もありません**」と言い張るパリサイ人、律法学者をはじめとするユダヤ人指導者たちを表していると言えます（ルカ 18:11、ヨハネ 9:34、41、）。「**家に入ろうともしなかった**」とたとえられているように、世の終わりには彼らは天に引き上げられることはなく、「神の御怒りの日（ローマ 2:5）」とも呼ばれる大患難の中に最後まで残されます。それが「**兄は怒って、家に入ろうともしなかった**」というたとえには表されているのです。つまりこの兄の怒りとは、兄が怒りの中にあることを指し、それはすなわち神の御怒りの中にとどまること、大患難の中に置かれることを意味しているのです。

しかし終わりの日、かつてのユダヤ人指導者たちではなく、本当の意味で神の戒めを破らず、神に従いとおし、与えられたその使命を果たす者たちがイスラエルの中から起こされます。それがイスラエ

ルの残りの者です。ですからこの「**ご覧ください。長年の間、私はお父さんにお仕えし、あなたの戒めを破ったことは一度もありません。**」という兄息子の言葉には二重の意味があり、究極的には偽りのない事実として、終わりの日、神の御怒りの日の中、大患難の中にありながらも主に仕え、主の戒めに従いとおすイスラエルの残りの者を表しているのです。こう預言されているとおりです。

イザヤ書【新改訳 2017】

10:20 その日になると、**イスラエルの残りの者**、ヤコブの家の逃れの者は、もう二度と自分を打つ者に頼らず、イスラエルの聖なる方、主に真実をもって頼る。

ゼパニヤ書【新改訳 2017】

3:13 **イスラエルの残りの者**は不正を行わず、偽りを言わない。その口の中に欺きの舌は見つからない。まことに彼らは草を食べて伏す。彼らを脅かす者はいない。」

そして最後に、息子の父親の方から出てきて「**子よ、おまえはいつも私と一緒にいる。私のものは全部おまえのものだ。**」と言われることがイスラエルの民の上に成就するのです。すなわちこう言われているとおりです。

創世記【新改訳 2017】

28:13 そして、見よ、主がその上に立って、こう言われた。「わたしは、あなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である。わたしは、あなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫に与える。

28:14 あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西へ、東へ、北へ、南へと広がり、地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される。

28:15 見よ。わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」

兄息子についてのたとえをこのように解釈しなければ、父親のこの対応、言葉の意味は理解できません。なぜならイエシュアが当時のユダヤ人指導者たちに対してこのような優しい態度や語りかけをしたことなど一度もないからです。それどころか「忌まわしいものだ」と常に非難しておられます。このようにイエシュアは常に終わりの日を見ておられ、そこに起こされる後の者となった先の者であるイスラエルの残りの者を指してこのたとえを話されたのです。実に彼らの働きによって弟息子にたとえられた大勢の異邦人が福音を聞き、そして信じて主に立ち返り、救われるのですから。そして彼らイスラエルの王国を再興することこそが神のご計画の完成である「神の国」の成就です。イエシュアはこの「神の国」だけをひたすらに目指しておられるのです。どうか私たちの目もこのイエシュアに倣い、御国を待ち望み、宣べ伝える者となりますように。

本日のキャスト：

父…主、弟息子…大患難の中で救われる異邦人、御座に挙げられる大勢の群衆
豚…携挙される教会、兄息子…イスラエル（の残りの者）